

ガレキの跡地に鎮守の森をつくろう



宮脇 昭 みやわき・あきら 84歳

1928年岡山県生まれ、植物生態学者。(財)国際生態学センター研究所長、横浜国立大学名誉教授。93年まで横浜国立大学環境科学研究センター教授を務める。著書は『植物と人間』(NHKブックス)、『木を植えよ!』(新潮選書)など多数。

東日本大震災では、南北300キロメートルに防潮林として植えられていた何十万本ものマツが、津波の被害などで失われてしまいました。松だけでは津波を防げない。タブの木は残っていた。本物は厳しい社会でも残っている。松だけではなく、松を支えるカシの木、シイの木等を混ぜて植えると良い。

震災の当日は、インドネシアで現地の植生調査をしていました。ホテルのテレビで震災の被害状況を知ってショックを受け、すぐに帰国の手配をした。4月に入ってから被災地を回り、地元の方の了解を得て海岸林の被害状況について調査を行いました。すると、やはり海岸沿いのマツはほとんどが根こそぎ倒れ、内陸まで流されていたのです。しかし、深根性、直根性のタブは、津波の被害があった南三陸町や釜石市でも倒れず残っていました。

もちろん、マツ林でも、その土地本来の潜在自然植生の主木群であるタブやシイ、カシ類などが十分混生しているのであれば、防潮林としての働きも期待できます。私の現地調査では、和歌山にある御坊発電所の対岸の煙樹ヶ浜、三重県の七里御浜のマツ林は、このような条件を満たしていました。

このような調査も踏まえ、東日本大震災のような被害が二度と起こらないように、私は海岸近くに土地本来の木々を中心に植樹した防災・環境保全林、「森の防波堤」を作ることを提案しています。

科学技術が発達して、数字とか金で換算できるものだけを大切に、数字で計れないものは排除されてきた。昔から一番多く植えられたのが松、松しか育たないと思われていた。色々な植物に支えられ松の命は生きてきた。これは生物社会のきまり。松だけにした所は全滅。防災の観点からは色々な種類の木を混ぜて植えなければならぬ。松は針葉樹で早く成長するが根は浅い。松・杉・ヒノキなどは過去の種類。これらは人間が意識して増やしたものだ。

タブノキは日本民族を代表する木。広葉樹のタブ・シイノキ・シラカシ・等はアオキ・ヒサガキなどの下を支える木と共生している。40億年前に自然の奇跡で地球ができた。4億年前に植物が陸にあがった。3億年前、雨が多く、わらび、しだが増えた。しだ植物が時代と共に進化。シイノキ・タブ・カシ等の常緑広葉樹も出現。進化の過程で松は広葉樹に押されている。また松は自然生態系で考えられる250倍もあり増えすぎている。海岸は黒松、内陸は赤松・と言ふ具合に。

今回は1000年に一度の災害、2万人が死んだ。ガレキを生かして平成の鎮魂の森、希望の森を作りたい。日本では3本、木を植えれば森。5本植えれば森林という。南北300キロに防潮堤を作りたい。自分は今、84歳。あと30年は生きたい。先日、皇居で両陛下に平成の森の説明をさせていただいた。明治天皇は明治神宮を残された。当初40分の予定を1時間5分も伸ばし身を乗り出してお聞きいただいた。

世界の人々は自分の森作りを宮脇メソッドという。その土地で栄える木を探しそれを生かす。国内だけでなく海外でもボルネオ・ブラジリアマゾン・中国の万里の長城近辺でも森作りを指導。万里の長城の麓はかつては森だった。500キロの長城を作る際に森を破壊。1997年に黄河の水を綺麗にする森を作って欲しいの！要望に答え、色々調査した結果、この地では「蒙古ナラ」を主木にするのが良い、という結論に達した。しかし、現地の人からは「蒙古ナラ」は絶滅したといわれた。しかしある人が一本だけ残っています、という情報をもとにさらなる「蒙古ナラ」を探し出した。その後10万個のポットを育てた。日本からも多い時は3500人のボランティアを集め、この10年間で100万本の植樹をした。35度の暑さにも係らず汗を流し、植樹をする日本のボランティアの女性に現地放送局がインタビューした。何故？彼女の答えは「一生に一度位、良いことをしたいと思って万里の長城植樹に参加した」でした。最初に植えた苗はすでに5、6mに成長している。

ブラジルでは植林を始めて30年たつ。6mほどの穴を掘り、枯葉、焼いた灰など土と混ぜ植林。マレーシアでは破壊された熱帯雨林が再生。10年間で201種類の植物が復活。

日本では震災によって膨大な量のがれきが発生し、この処理も問題となっています。このがれきこそ、「森の防波堤」作りにおいて積極的に使用したい「地球資源」です。

がれきには自動車のバッテリーなど有害物質を含むものがありますので、これらの毒素は除外します。そして、倒壊した家屋の木材やれんが、コンクリートといった多くのがれきがある程度の大きさに砕いて土と交ぜることにより、「森の防波堤」のマウンド(土台)作りに活用します。そのマウンドの上に、土地本来の常緑広葉樹を中心にポット苗で混植するのです。そうすれば、15~20年後には、多層群落の本物の森が育ちます。その根群は深く育ちますので、マウンドのがれきをしっかりと固定できます。また、がれきで土中にすき間ができるため、根が呼吸できるのです。

がれきを利用した森作りには先例があります。たとえばミュンヘンの都市林では、第2次世界大戦の戦災がれきを土中に埋め、土地本来の樹木の森が育っています。

「森の防波堤」は15~20年でマウンド上で20メートル以上の高さになり、津波被害の防止に役立ちます。環境保全林や観光資源としても、地域社会に貢献できるでしょう。

文部省は「生(なま)の命の尊さを教えていない」。「森は命の泉」。「木を植えることは命をうえること、人の心に木を植えることです」。

どんな財産にも変えがたい植樹をして欲しい。